

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 27 日現在

機関番号：17401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720265

研究課題名(和文) 英語教師志望学生の不安・懸念の質的事例研究：グラウンデッド・セオリー・アプローチ

研究課題名(英文) A Qualitative Study of Preservice English Teachers' Anxiety: A Grounded Theory Approach

研究代表者

長嶺 寿宣 (Nagamine, Toshinobu)

熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号：20390544

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：日本の大学で英語教員養成課程を履修する学部生2名を対象に、英語教師になることに付随する不安・懸念の実体・実態並びに教育実習体験との関連性(実習における不安・懸念の形成・変容プロセス)を調査した。被験者個別のデータ分析と被験者間のデータ比較を基に、主な懸念材料は大きく3つに分類できる。「授業実践の方法」、「英語教師の英語力」、「他者の視線」である。それぞれの下位に、「職業的同一性」や「自己効力感」等の因子が存在する。教育実習を経て解消されなかった不安、「教師になる」意思を後押しする不安、教師としての適性を疑問視するきっかけとなりうる不安等を特定し、様々な不安の形成・変容プロセスを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This qualitative case study investigated anxiety-related factors affecting preservice teachers to become English teachers in Japan. The participants were two undergraduate students enrolled in a university-based EFL teacher education program. This study was conducted in such a way that the term of investigation covered the participants' teaching practica so as to uncover the development and/or the transformation processes of anxiety during the practica. Single-case analysis and across-case analysis indicate that there are three meta-themes: Teaching Methodology, English Language Proficiency, and The Eyes of Other People. Each meta-theme contains such themes as professional identity and teacher self-efficacy. This study revealed that there were both facilitative and debilitating anxieties, various causes of anxieties, and the development/transformation processes of anxiety relating to the experience of teaching practica.

研究分野：英語教授法・応用言語学

キーワード：英語教員養成 英語科教育実習 不安 言語教師認知

1. 研究開始当初の背景

(1) 言語教師認知研究

今日、英語教授法及び応用言語学の分野では、英語教師(正確には、広義の「言語教師」)の認知(cognition)に焦点をあてた研究が脚光を浴びている。教室で用いられる教授法や指導テクニックなどの客観的に観察・評価が可能な教師の行為よりも、客観的に観察・評価がしにくい個々の教師の認知(思考、信念・信条、意思決定)を研究対象とした方が、教師の学び(teacher learning)や教師の成長(teacher development)の認知的変容プロセスの解明に直結する示唆的事項が入手しやすいからである。

たとえば、教師の信念・信条(以下、ピリーフ)の形成過程を調査した研究によって、教師としての教育観・授業観の形成には、生徒として過去に授業を受けた経験が大きく関与しており、教員養成課程に入る前の段階ですでに確固たるピリーフが形成されていることが明らかになった。この研究成果から、教員養成課程で行われるべきトレーニングは、特定の指導法・教授法の模倣や反復練習などではなく、各々のピリーフの可視化と可視化されたピリーフの適切な修正・訂正を促す指導及び支援が必要であると認識されるようになった。英語教員養成プログラムで近年注目を集めているリフレクション(内省、振り返り)を重視した認知活動、授業実践の分析に探求型アプローチを援用したアクション・リサーチが、教師の学びと成長に有効であることが支持されている所以である。

教師の認知の解明は、教師の授業実践を理解する上で一見遠回りのようにみえるが、そうではない。筆者は、過去の科研費研究(若手研究(B))を通して、日本の大学に在籍する英語教師志望学生の言語学習・指導に関わるピリーフの構築・再構築に、職業的同一性(professional identity)が深く関与していることを明らかにした。教育実習中に言語教師(language instructor)から教育者(educator)への変容がなされ、職業的同一性の変容とともにピリーフの再構築が連動して行われる可能性が示唆された。

教師のピリーフの構築・再構築と職業的同一性の変容プロセスの解明は、授業実践についての様々な問題、たとえば指導法や授業スタイルなどが「なぜ」「どのように」教師によって選択され、また実践されるのか(もしくは実践されないのか)、「なぜ」特定の指導法にこだわり授業スタイルを変えることを執拗に拒むのか等の問題を理解する上で極めて重要な手がかりを与えてくれる。

矢継ぎ早に施行される英語教育改革の中で、よりコミュニケーション型な授業実践への転換が求められているが、教師の授業実践を変えるためには、その前提として、まず教師の認知を変える必要がある。言語教師認知研究は、教員養成課程で求められるトレーニングの在り方や現職教員を対象とする悉皆研修

などの在り方を検討する際の非常に有用な視座と知見を提供していると考えられる。しかし、教師の認知が注目を集める一方で、やや軽視(場合によっては無視)されてきたものがある。教師の情緒性(emotionality)の探求である。

筆者は、先述の科研費研究において、社会文化・教育的文脈に依存する様々な情緒的因子が複雑に絡み合う形で職業的同一性の形成と変容に深く関与していることを明らかにした。教育実習中に観察された被験者の職業的同一性の変容は、当然ながら認知面の変化と捉えることができるが、この認知面の変化には、数多くの情緒的因子が関わっていた。特に、教師の不安・懸念(teacher anxiety)という因子が、認知的な変容を方向付ける、もしくは認知的な変容の「質」を決定づけていることが分かった。

(2) 教師の情緒性

英語教授法及び応用言語学の分野で現在用いられている「言語教師認知」(language teacher cognition)という語は、サイモン・ボグ(Simon Borg)氏の論文や著書での使用が発端となり諸分野で広く使用されるようになった。本研究の成果を基に、筆者が執筆編集を行った図書『言語教師認知の動向』(開拓社)において詳細は論じたが、筆者は、この「言語教師認知」という語が、研究者による十分な議論を経ずに広まったことによって、教師の情緒性の問題が軽視、または無視される状況を招いたと考えている。

教師の認知を探求すればするほど、多様な情緒的因子の存在に気づかされる。また、情緒的因子は、認知的因子と切り離すことができないということを痛感させられる。先述の科研費研究を終えて、情緒的因子である「不安・懸念」に焦点をあて、認知的側面からではなく、情緒的側面から教師の学びを捉える試みが必要であると考えた。それが本研究の着想に至った経緯である。

本研究を開始した当初、英語教授法と応用言語学の分野では、教師の情緒性に着眼した研究は希少であった。「英語教師になることに関与する不安・懸念」という研究テーマにいたっては、主に英語圏の大学院に在籍する院生や現職英語教師を対象にした研究事例がいくつか存在した程度で、大学に在籍する学部生を対象にした研究事例は極めて少なかった。さらに、日本を含むアジア諸国の大学生を対象にした研究事例は皆無に等しい状況であった。本研究は、以上のような学術的背景を考慮した上で計画・実施された。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、英語教師になることに付随する不安・懸念の実体・実態並びに教育実習体験との関連性(実習時における不安・懸念の形成・変容プロセス)を明らかにすることである。具体的な研究目的は次のよ

うに纏めることができる。

- (a) 英語教員養成課程を履修している日本
人大学生2名の英語教師になることに
関わる不安・懸念(anxiety)の実体を明
らかにする。
- (b) 英語教員養成課程を履修している日本
人大学生2名の英語教師になることに
関わる不安・懸念の形成過程を記述分析
する。
- (c) 英語教員養成課程を履修している日本
人大学生2名の英語教師になることに
関わる不安・懸念の形成過程と教育実習体
験との関連性を解明する。

3. 研究の方法

本研究では、定量分析・量的アプローチではなく、帰納的分析・質的アプローチを採用した。前掲の研究目的を達成するため、深層インタビュー(in-depth interview)を複数回実施し、得られた質的データに対してグラウンデッド・セオリー・アプローチ(Grounded Theory Approach: GTA)を援用したデータ分析を行った。また、創出されたデータ分析結果の信頼性と信憑性の向上を図るため、学部生の被験者については、個別インタビューに加えて被験者2名と研究代表者1名を含むグループ・ディスカッション(集団インタビュー)を研究期間に複数回実施し、被験者とともにデータ解釈・分析結果の正確さを確認・検討した(member checking)。このグループ・ディスカッションでの研究者の位置づけは、参加観察者(participant observer)である。

(1) 被験者

被験者は、熊本の公立大学に在籍する学部生2名(男女各1名)である。本研究では、定量分析に用いられる確率抽出法や無作為抽出法ではなく、有意抽出法を採用し被験者の選定を行った。選定の基準は、卒業後英語科教員になることを強く志望しているか否か、また4年次に教員採用試験を受ける計画があるか否かである。

選定した被験者2名から収集した質的データを主要データとして位置づけ、GTAによる定性分析の過程において実施される理論的サンプリングは、現職教員2名(男女各1名)と大学院生2名(男女各1名)を対象に実施した。理論的サンプリングとは、主な研究対象である現象(本研究では不安・懸念の実体と実習中の形成プロセス)を説明しうるデータに基づいた理論(grounded theory)の構築を効率化するために、主要データに不足している、または主要データの分析結果に基づいて必要と判断しうる情報を補足データとして収集し、理論的に比較検討する作業である。

(2) GTAによるデータ分析手法

本研究で入手した質的データはGTAの定性分析手順に従って、すべてのデータを切片化し、切片化したデータごとに特性(property)、次元(dimension)、コード(label)を抽出し、それらを纏める形でカテゴリ(category)を創出する作業を行った。その後、カテゴリ関連図の作成に着手し、理論的サンプリングを通して入手した補足データや主要データのコード等を比較・参照し、研究対象である現象が説明可能となる理論の構築を行った。なおGTAによるデータ分析は研究期間中継続的に行われており、各種のデータ収集(補足データも含む)と並行して実施された。

4. 研究成果

被験者個別のデータ分析(Single-Case Analysis)及び被験者間のデータ比較(Across-Case Analysis)を基に、「英語教師になることに関わる不安・懸念」を3つのテーマ(emerging theme)に集約する。「授業実践の方法」、「英語教師の英語力」、「他者の視線」である。以下、それぞれのテーマに付随するトピック(「文法指導の方法」、「自我・自己同一性(identity)」、「自己効力感(self-efficacy)」等)に適宜言及し、主な研究結果を記述する。

(1) 授業実践の方法

授業実践の方法に関わる不安は、教育実習時にほとんど解消されておらず、実習後も懸念材料となっていた。具体的に挙げられた不安材料は、板書の仕方のような具体的な教師の行為に関わるものから勤務校の規模や校風、学校特有の文化に関わるものまで多種多様であった。勤務校の規模や校風は、生徒指導の方法に関連する懸念材料とも密接に関わっており、被験者間で共通して、「生徒指導が適切に行えないと教科指導が成り立たない」というピリフが観察された。そのピリフがあるがゆえに、学校の校風や文化が懸念材料となっていた。

被験者の1人は、実習時に学習障害を持つ生徒の指導に携わっており、その経験がきっかけで特別な支援が必要な生徒に対する授業実践の方法に興味・関心を抱き始めた。換言すれば、教室にいる生徒を集団として指導する際に、生徒個別のニーズにどのように応えればよいのかという現実的な課題への興味・関心である。「興味・関心」という言葉からも分かるように、「授業実践の方法」に関わる不安は、明らかに不安ではあるものの、その程度は低く、またどちらかといえば教育現場で教職経験を積む中で積極的に解決していきたいというポジティブな感情を伴っていた。教育実習時に問題意識が芽生えたことで、教師になってからぜひ探求していきたいという、「教師になる」という意志を後押しする不安(facilitative anxiety)であると

解釈できる。

実習中に解消されなかったもう一つの不安として「文法指導の方法」が挙げられる。先述の「教師になる」という意志を後押しする不安と異なり、この懸念材料は「教師になる」という意志を弱め、時に英語教師になることを断念することをも考えさせるような負の影響をもっている（debilitative anxiety）。背景には、今日の高等学校において既に施行されている「英語で英語の授業を行うことを基本とする」政策の存在がある。英語でコミュニケーションな授業を行うことができるのか、自身の英語力で対応可能なのか、さらに入試等のニーズ（生徒及び保護者の期待を含む）にどのように応えていけばよいのか等、我が国で進められている英語教育改革に起因するとみられる懸念材料が観察された。これらの懸念材料の中核にあるのが、「文法指導の方法」である。

被験者が過去に生徒として受けてきた英語科授業は、文法用語を多用した訳読中心の授業だった。被験者は、訳読中心の授業をそのまま英語で行うことは不可能であると認識しているが、「文法用語を使わずに英語で文法を指導する」具体的なノウハウがイメージできずにいた。これは、教育実習中に具体的な事例に触れる機会がなかった、あるいは関連する指導が適切に行われなかったことを示唆している。

被験者は、大学の教科教育の授業を通して、コミュニケーションな授業の在り方（CLT: Communicative Language Teaching の原理や特徴）、英語で行う文法指導（特に帰納的な文法指導）の手法を学んでいた。理論的な知識（theoretical knowledge）はある程度習得していたと判断できる。しかし、教育実習の場において、実践的な知識（practical knowledge）に触れる機会がなかったため、「理論と実践のギャップ」が原因とみられる懸念材料を抱くに至った。文法指導を英語で行うこと、または英語でコミュニケーションな授業を実践することに対する不安は、後述する「英語教師の英語力」と相互に関係していた。「英語教師としての自分自身」のイメージに負の影響を与えかねない因子であり、被験者の「自我・自己同一性」（ここでは職業的同一性）の形成にも悪影響を与えかねない。

（２）英語教師の英語力

被験者は「英語教師に求められる英語力」を各種の筆記試験で測定されるようなもの（言語知識）ではなく、技能として実際に運用できる力であると認識していた。また、その運用能力は、日常生活において意思疎通できる（英会話できる、英語で簡単なメールのやりとりができる等）技能ではなく、英語で行う授業の中で教師に求められる「特別な技能」として捉えられていた。「英語で英語の授業を行うことを基本とする」政策やコミュニケーションな英語科授業が強く意識されて

おり、「特別な技能」の一例として被験者が挙げたのは「言い換え（paraphrasing）」の技能である。

生徒が理解できない表現や語彙を、「短時間かつ即興で分かりやすい英語に適切に言い換える」技能は、被験者によれば、実用英語検定試験や TOEIC などの標準テストでは測られていないという。被験者は２名とも実用英語検定試験準１級を取得していたが、授業中に生徒の理解を手助けするために、その場で、また短時間で適切な言い換えができるという自信はないと述べている。

加えて、英語教師は「生徒が英語で表現したいこと（適切な語彙や表現等）をすべて知っているべき」という考えをもっており、被験者が抱く「理想的な英語教師の英語力」は非常に高いレベルであった。「英語教師の英語力」は「特別な技能」を含むものであるという認識と教育実習時に直面した「理論と実践のギャップ」によって、被験者の英語教師としての自己効力感（self-efficacy）が低下していた。自己効力感とは、将来のある状況において、必要な行動をうまく遂行できるかという可能性に関するピリーフである。被験者が、英語で英語の授業を適切に行えるようにするためには、英語で「言い換える」技能等のトレーニングを実施し、また文脈から乖離する形で過度に高められた「英語教師の英語力」のイメージを適切化する必要がある。

自己効力感に関連して、被験者１名については、「海外への留学・渡航経験」が欠けていたことに起因する不安が観察された。海外への留学・渡航というと、語学力に関係があるように思われるが、本研究では、「海外への留学・渡航経験」は「英語教師の英語力」に直接関与する因子ではなく、次に記述する「他者の視線」との結びつきが強かった。

英語力に関する不安にはもう一つ特筆すべきことがある。被験者は、英語を運用する時、場面・状況（友人との日常会話、実習校での授業、大学の英語の授業など）によって、感じる不安の程度が異なるという。この「不安」は、被験者が英語を使用する時に感じる「自信」の程度とも解釈できる。コミュニケーションする相手がネイティブか否か、日本人か否か（日本人の場合、英語力が高い人物か否か）、自分が話題となっているジャンルやテーマに精通しているか否か、さらに授業場面となると、その教室に帰国子女がいるか否か、他教員（英語科）がいるか否か等によって感じる不安に質的な違いがあった。

傾向として、自身の英語力よりも高い運用能力をもった他者が同じ空間に存在する場合、自分が使用する英語の正確さ（語彙選択、文法、音声等の適切さ）が過度に意識され、積極的に英語を使えない心理状態になる。

「間違いを指摘される恐れ」を感じ、自分の英語に対する自信が低下する。「正確さに対する過敏さ」や「間違いを指摘される恐れ」は、被験者が生徒として英語科の授業を受け

てきた中で、流暢さよりも正確さが重視され、英語使用上の誤りが忌むべきものとして扱われていたことが一因となっていた。英語教師が「間違いを指摘される恐れ」を抱き「正確さ」を過度に意識している状態では、「流暢さ」を重視したコミュニカティブな授業の実践は不可能ではなくとも、極めて困難であるといえよう。

(3) 他者の視線

教育実習の前後と比較して、被験者は他教員、保護者、生徒といった第三者の目を意識するようになっていた。職業的同一性にも関わる変化だが、注目すべきは、被験者の1人が、教育実習時の生徒指導及び教科指導上の失敗経験が原因で、自分自身の「教育者」「英語教師」としての適性を懐疑的に見始めていた点である。教育実習時に生じる職業的同一性(自分自身を「教師(または英語教師)」としてどのように捉えるか)の変容は情緒的に不安定な状態を引き起こす。逆に、失敗経験がきっかけで不安定になった情緒が職業的同一性の変容を引き起こすことも考えられる。当該被験者の場合、後者であり、授業時の失敗を経験した後、指導教員や生徒が自分をどのようにみているのか気になって仕方がなく、常に不安を感じていた。実習後、その不安は、「果たして自分自身は教師としてふさわしい人物なのか」、そして「教壇に立つべきなのか」を考えたくなくても考えてしまうという暗澹たる認知状態をつくり出していた。

以上、学部生の被験者2名について主な研究結果を記述した。データ分析の過程で抽出された多種多様な不安・懸念の材料は、各被験者によって不安に感じる程度は異なっており、その理由も様々であった。被験者2名のうち1名(被験者A)は、英語教師になることに付随する最も深刻な懸念材料は「他者の視線」であると認識しており、もう1名(被験者B)は「英語教師の英語力」であると述べている。グループ・ディスカッション時に、GTAによる定性分析を通して創出されたカテゴリー及びサブ・カテゴリーの中から任意に選定したものを被験者に提示し、被験者の感覚でマッピングするよう指示した際、図1及び2のような結果が得られた。

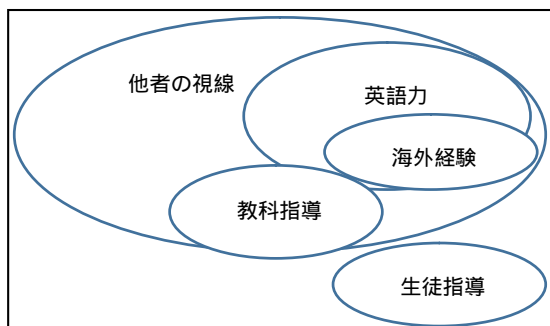


図1.被験者Aのマッピング

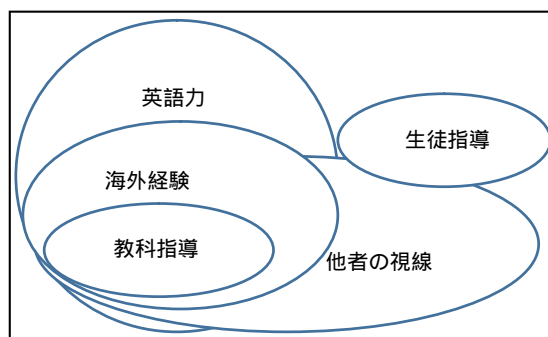


図2.被験者Bのマッピング

最後に、理論的サンプリングの対象となった現職教員並びに大学院生のデータについては本報告書の中で言及していない。補足データの詳細は、研究成果として出版されている研究論文と学術図書を参照されたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

Nagamine, Toshinobu. (2013). Preservice and Inservice EFL Teachers' Perceptions of the New Language Education Policy to "Conduct Classes in English" in Japanese Senior High Schools. *Multiculturalism in Asia: Proceedings of the Second Afrasian International Symposium*, pp. 123-139.

Sasajima, Shigeru, Nishino, Takako, Ehara, Yoshiaki, & Nagamine, Toshinobu. (2012). Aspects of Japanese EFL Teacher Cognitions on Communicative Language Teaching (CLT) [JACET-SIG on LTC]. *JACET The 51st International Convention Proceedings*, pp. 375-382.

[学会発表](計4件)

Matsumura, Shoichi, & Nagamine, Toshinobu. (June, 2014). Critical Review of Foreign Language Education Policy and Practice in Japan. Presented at the Spring 2014 INLEPS (International Network for Language Education Policy Studies) Conference, Kaohsiung, Taiwan.

Nagamine, Toshinobu. (January, 2014). Nonnative EFL Teachers' English Language Proficiency to Teach Classes in English: A Qualitative Case Study of Teacher Anxiety. Presented at the 10th Asian EFL Journal International Conference, Manila, Philippines.

Nagamine, Toshinobu. (November, 2012). Preservice and Inservice EFL Teachers' Perceptions of the New Language Education Policy to "Conduct Classes in

English” in Japanese Senior High Schools. Presented at the 2nd Afrasian International Symposium: “Multiculturalism in Asia,” Kyoto, Japan.

Nagamine, Toshinobu. (September, 2012). Junior-high School English Teacher's Perception of CLT: Grounded Theory Approach. Presented at JACET-SIG on LTC Symposium: Aspects of Japanese EFL Teachers' Cognitions on Communicative Language Teaching (CLT) [JACET-SIG on LTC], JACET The 51st International Convention, Aichi, Japan.

〔図書〕(計4件)

Nagamine, Toshinobu. (2017). The Potential for Non-native Teachers to Effectively Teach Speaking in a Japanese EFL Context. In Juan de Dios Martinez Agudo (Ed.), *Native and Non-native Teachers in Second Language Classrooms: Professional Challenges and Teacher Education* (in press). Berlin, Germany: De Gruyter. [ISBN 978-1-5015-0415-0]

Nagamine, Toshinobu. (2014). Preservice and Inservice English as a Foreign Language Teachers' Perceptions of the New Language Education Policy Regarding the Teaching of Classes in English at Japanese Senior High Schools. In K. Shimizu & W. Bradley (Eds.), *Multiculturalism and Conflict Reconciliation in the Asia-Pacific: Migration, Language and Politics* (pp. 99-117). Hampshire, UK: Palgrave Macmillan. [ISBN: 978-1137403599]

笹島茂・西野孝子・江原美明・長嶺寿宣(編著)(2014)『言語教師認知の動向』(開拓社)担当章「第2章 言語教師認知研究の最近の動向」(pp. 16-32) [ISBN: 978-4758921978]

笹島茂・西野孝子・江原美明・長嶺寿宣(編著)(2014)『言語教師認知の動向』(開拓社)担当章「第8章 ポスト教授法の時代と英語教師の認知および情緒」(pp. 112-128) [ISBN: 978-4758921978]

〔その他〕

長嶺寿宣(2015年1月24日,於立教大学)「なぜ英語教育改革はうまくいかないのか」JACET 言語教師認知研究会第8回懇談会;本研究の成果に基づいて,特に理論的サンプリングを行った現職教員1名のデータ分析結果を踏まえ,教授法に関わる認知・情緒,英語教師の英語力,自己効力感を議論し,我が国における英語教育改革の実態と関連付け

て講演を行った。

6. 研究組織

(1)研究代表者

長嶺 寿宣 (NAGAMINE TOSHINOBU)
熊本大学・教育学部・准教授

研究者番号: 20390544

(2)研究分担者

該当なし

(3)連携研究者

該当なし